

うたそら

第
18
号

2024
January

1

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
ほっとひといき クロスワード	17
テーマ詠欄「新」	18
一首評「そらよみ」	22
短歌リレーコラム「望遠鏡」	24
リレーエッセイ「いちごいちえ」	26
次回予告・編集後記	27



碧乃そう	@hane_aoz22	泳二	@ejishinada
秋山生糸	@kito25	h.s	@hswelt
麻倉ゆえ	@AsakuraYue	大坪命樹	@OotsuboMeiju
雨虎俊寛	@amefurash13107	歌島孟	@Snn1990
有村桔梗	@chattenoire_k	がね	@amicus08
井倉りつ	@uta_litz	河井景都	@kareido1111
池田竜男	@tanakadragonman	かわはう	@suikanikan_kawa
十六夜ノ朔	@izayoi_2022	氷谷雪	@kitaya_misoniso
石川順一	@Hitler57	きまぐれおゆめ	@Oyukimagure
いふじしょうた	@827657	君村類	@kmnr_r09
魚野さざみ	@_uono	くうたか湖春	@Koharu_kura
宇祖田都子	@Shimnsyutu2020	くうただたけし	@tkuro2016

白藤あめ	@ametxt	御糸ちゅ	@MEATsachi
寿司村マイク	@xHksbNR4w1wj8M	深影コトハ	@Cotoha_Mkage
せいや	@petitchante	未知	@michi_31w
たえなかつす	@suzusuzu2009	水也	@m_iya_o
多香子		宮岡りょう	@myao_rrr
千原こはぎ	@kohagi_tw	深山睦美	@57577_77575
ともえ夕夏	@croissant_hey_z	虫武一俊	@mushitake
中村成志	@nakam8	村田一広	@mucci2022
夏生 薫	@kaorunatsuo	森内詩紋	@Njg40Ev95gICRpu
なべこびすこ	@nabelab00	杜崎アオ	@morisaki_ao
奈瑠太	@naida_aa	杜野詩季	@4kitanka55
西淳子	@jacky244Ray	雪垣	
薄荷。	@aie0himeco	好乃智紀	@yoshino_tomoki
はゆき咲くう	@8yuki_3kura	臙	@rou_tanka
疼木快維	@kaika1031127		
廣珍堂	@hirochin_dos		
笛地静恵	@Ymco6fhjEZgwg		
福山桃歌	@momoka_fukuyama		
細川エリカ	@luvlvukasen		
真岡まな	@mao_or_mana		
まゆけ	@mskpompomfuwa23		

計68名

たくさんのご参加
ありがとうございます！

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

Voiceless

碧乃そう

オーヴァチユア 虹の橋からなないろの音符が跳ねて晴れやかに降る
師走ちかき街はせわしくりんりんりのリズムで心を囁す
淋しさが咲かせる花の色は知らずポインセチアの紅蓮は燃えて
街並みは冬枯れの色が滲んでかさかさと泣くわが恋心
誰が為に雪は降りつもる あなたへの贖罪をかき消す無垢の白
仄暮れの蝶の羽ばたきが湖を越え夜霧の街のかなしみを揺らす
薔薇の棘 しくしくと痛む瘡蓋を剥がそうとしてしまうのはなぜ
テラリウムの小壺をふうとふくらませ春を待たずに花を咲かせる

色彩

秋山生糸

色彩のうすい窓辺にみどり児の眠りのあつて雨あまく降る
本当は笛に生まれたかったんだ ただひとときの風を導く
外宇宙の星もまばらな果てにある流れに浸っていた耳です
いくつもの河を渡ってきた先の平野に架かる天使のはしこ
充電中のスマホを抱いて眠るとき生まれるすべての子らに祈りを
海沿いのとても小さな観覧車 どんな音色になっても好きだ
午後の陽のなかに落ち葉は渦まいて触れるものみな鍵盤になれ
昨日からほつれた糸が帆船を描く 始末の悪いことになさ

夏解けて 六甲ランドA O I Aのスーパーパー最高だった
世界初イルミネーション搭載の観覧車を背に「写ルンです」を
風見鶏がキョロキョロしつつ見おろしたふわりマフラー巻かれてる人
ぼくたちが赤や緑や金色に神戸の街を塗り変える夜
武庫川を越えてしばらく空仰ぐ 寝そべっている高速道路
平成が終わって六年 きみが居た神戸の街を少し歩こう
今はもうあの観覧車は移設されハーバーランドの風車になった
橙に滲むタワーを振り返ることができずにもう三ノ宮

あの世の門で待ち合わせ

井倉りつ

死にてえな、ってこぼすくちびる吸いとしてしゃばんだまにして飛ばしてあげる
ハイボールだった液体に混じって逆流している潰した心
悪心とはわるいところだ 吐けばほら汚してしまう壊してしまう
吐いたもの、そのまま置いて。おやすみのあとにわたしが磨いとくから
天国に行けない君はきつとまた君に生まれてしまふんだろう
「新しい名前つけてよ はぐれても忘れてもまた好きになつてね」
そんな先の約束守れないよっていま笑いあうためのゆびきり
何度目のいとしきみ、そうだった、前世も恋で死んだんだった

像のゆくえ

いふじしょうた

任せてよ未来のはなの花言葉わたしが全部「幸福」にする
お金への依存が病気ほどならばもっと楽して生きていけたな
はばたける羽を授かり自由得て飛ばないことで安心も得た
蚊取り線香の煙が揺らぐよう役にたちつつ消えていきたい
湖は静を操る 人の声は聞こえないただあなたをのぞき
お互いが自然と消えていった跡 とても綺麗な地層ができた
信じてる心のどこか片隅で花束をまだ握るくらいいの
走り出すじぶんの残像を横目につらが落ちたその後のゆくえ

屋上猿部 18

宇祖田都子

小春日を告げたる氣象予報士の眼帯白し屋上は雪
先輩の指さす角に屋上の結界破る五線譜の呪詛
新任の国語教師が黒板の日影に記す悪夢の記憶
五年前屋上猿部存亡の危機に封印せし蛇遣ひ
背の低き古典教師は大雪の放課後をもち顧問を辞しぬ
存続のために除名を受け入れし後は悪夢の内に棲みにき
猿小屋に国語教師は横たはり無数の猿の群がるまだら
眼差しに猿を捕らえしことあらば涙は全て有毒ならむ

アンモナイトの記憶／タイムラプス

十六夜／朔

かなしみはくりかえすからともしびをかざしてきみのなまえよぶから
錆びついた太陽浴びて潮レテル 冷めない紅茶を飲みながら
モノクロームの海で象と泳ぐ／これより先には入れません。
今でない、いつかどこかを求めても、ここでないなら意味はないかも
なんとなくあるようでいてないような…やっぱりここにはありません。
タイムラプス（そうゆっくりと）ボクが世界を切りとってみせるから
眠れぬ夜タイムラプスの瞬きがアンモナイトの記憶とともに
かなしみはひとよふたよとかぞえるのやがてやさしくぬむりについて

「日常詠」

石川順一

冬に咲く朝顔木の上占めて居る鉢の支柱を越えて居るから
冬に咲く向日葵畑の隅に有る木やプラスチックの支柱にロープ
神社には葉牡丹蠟梅竹飾り松飾り有り火が焚かれたり
年越しの蕎麦にはニシンとゆで卵カリフラワーが付属として有り
神社へは詩集を持って出掛けたり小雨を頬に時折感じ
神棚が掃除をされて大晦日母は風呂場へ私は神社へ
鍵掛けを忘れて家へ戻る時撮り鉄君はいまだに水辺
冬桜葉牡丹並ぶ畑見て枯芝踏めば穴は無かった

わがまま

泳二

これからの話をしよう何回もおかわりしようドリンクバーで
顔を見て笑ったわけじゃなくてただ良かったな一って思ってただけ
ガリリックトーストできるだけ上手く半分こする指を見ている
青空は遠くまで行く僕たちの門出をレジの外で待ってる
確かめるように歩いて立ち止まり今日の目印のため手をとった
スーパーの駐車場から滑り出すあなたの車とあなたとわたし
いつだっけ高かったよねあのお店今度聞かせてくれよわがまま
イルミネーション、高速道路、窓越しに全部にじんて全部おいしい

不遇を託つ

大坪命樹

文学に己がまことを込めぬるに拙著のみ売れず 正しさ何ぞ
拙著のみ一冊だにも売れざるは不才がゆゑか 差別ぞ痛き
正しきのとほるべからざる世情見てわが不遇をば重ねみるなり
いにしへの不遇を託ちし先人ぞ思ほゆるかな なほ筆執らん
不遇なるあまたが先人めづらしき作を残せり われも倣はん
文学賞得るも得ざるもどんぐりが背くらべのごと 大きな世よ
作品の成るもとたるぞ創作が神なる 何ぞ作者か誇る
芸術の神性が証 差別せずわれをも優しく癒すべきこと

大拙館にいたワタシ

歌島孟

閉館の間際に着けば、騒ぎたつ心は雨に揺れる水面だ
大雨を気にせず飛んでゆく鳥よ。雨に急いだ肩が冷たい
湧きあがる詩情は軒端から落ちる雨粒みたたく、ふいに突然
慈雨なるや、この雨。木々があまねいて諸手を捧ぐようにさざめく
池の隅おどむ落葉の醜さに目がいく、僕は死がまだ怖い
Nothing is beautiful. 禅を説くふりして僕は何も知らない
露堂々、雨に打たれるひとつやは中にたたずむ者を庇える
鎖樋伝わる水は連綿と強くて、そこに遺偈は要らない

πを計算する

がね

自分だけ置いていかれるなんて嘘ぬるま湯だからこわい世の中
洗濯機を回す、生活を回す πを計算するスーパーコンピュータ
ぼくだけが独占してるシュレッダーされた紙たちやわらかいこと
ポケットを叩けば増えるビスケット二つじゃなくてこなごなになる
瑞々しい林檎と言われて脳内に浮かぶ瑞々しくない林檎
寄り添う、を考えながら延々と並ぶ街路樹走り抜けてく
盗まれて悲しい物が無い部屋に住めばひとりは軽いたましい
真っ直ぐに飛ぶ白鳥を追いかける数秒だけは走る動物

大阪旅行

涸れ井戸

退職の直前リフレッシュ休暇グリコのおまけのようにもらう
急激に主張を変える「右」「左」グーグルマップ躊躇い過ぎる
裏なんぼド真ん前の安ホテルの八階からは天国もすぐ
九年は御無沙汰してる大阪の炉端焼き屋に一人で向かう
次の日は大国町の図書館で尾崎まゆみ歌集を見つける
ラーメン屋カレー屋を経て夕方は俳句のワークショップに混ざる
最後の夜心斎橋のネカフェ泊身体斜めにして横たわる
タクシードライバーしてる友達へ梅田に寄って御歳暮贈る

テーマソング

河岸景都

もう少し練習時間が欲しかった、ひとの仕組みを学びたかった
何一つ正しいことは分からない、分からないまま朱色の名前
額縁の模様をそつとなぞりだす綺麗なことでもいいこともある
自分だけテーマソングを失って大人になった子供を撫でて
走り出す私をセーブするように同じ日付を丸で囲った
正解が正義でないと知っている右往左往を愛していたい
葬列のようなパーティーはまぼろし、主人公しか旅は出来ない
まだ行けるまだ行けるって足掻いてるエンドロールを終わらせないで

生ハムの原木家にあつたなら

かわはう

生ハムの原木家にあつたなら口説き文句としても使える
生ハムの原木家にあつたなら怖い上司にも強気でいける
生ハムの原木家にあつたならクラッカーの消費量が増える
生ハムの原木家にあつたなら鮑を一旦カートに入れる
生ハムの原木家にあつたならカットメロンについて手が伸びる
生ハムの原木家にあつたなら共同作業の練習になる
生ハムの原木家にあつたなら薄さの限界に挑戦する
生ハムの原木家にあつたなら世界が少し華やかになる

gift for

氷谷雪

お揃いの日めくりを買う待ち合わせできない早さで生きてゆくから
良い女になったねあおちゃん喪中だと知るや静かな花ギフト券
時々はひとりにおなりたつぷりのジャムを口の端に溢して
パドルのようなブラシで梳かす漕ぐことを止めれば失いそうな性別
四つ目の箸置き眠るキッチンで乳飲み子と待つほのかな夜明け
新しい息継ぎとして一片の鱗のようなピアスに触れる
なんでもない風に話そうわたしたち井とレンゲのように出会った
ライオンのフォトグラフィは(もうちょっと右かな)ふたりの神さまだ(よし)

ひとつとまん

きまぐれおゆき

ナンバーの末尾3だぞあれに乗れ春風尾行見失うなよ
高純度の密輸品だねさすがボス カカオ95%は
おい夏よ出所してからガラガラとイケイケだけじゃ熱中症だぜ
俺たちの手打ちは『・夏の引き渡し』『・拘束された秋の釈放』
ひとつとまん裏切り者を食い止めるアキのアニキは二の足速え
ころしやは木枯らしとかつて噂だぜ合図はびゅうと窓に口笛
買ってこい殺った現場にすんだから五、六鉢ほどポインセチアを
組事務所の構成員は百八人 煩惱まみれで收拾つかねえ！

花束

君村類

触れている鏡の中のわたくしがほほえむようにやってくる冬
Universe 見上げた空は町じゅうの照明よりも星があること
誰も彼も冬の装いの人混みはふつくらとして生きるのはこわい
本当はかかえるほどの花束として生きられるはずのわたしたち
落ちていく眠りの前の一瞬に見つけた星をもう叫ばない
なんでもない朝の日差しを受け入れる部屋の素直さだけほしかった
死んだとは聞かないせいでふたりでいた事実としての氷塊が途切れない
花束の大きな花から枯れていくあなたを声から忘れるのだろう

置き去りの

くろだたけし

庭の木を倒す重機は限られた動きでちゃんと仕事をこなす
人は木になりたがるけど木は人になりたがらない、これも自虐か
視線だと思って待ってみたけれど穴じゃないかと思ってもいた
置き去りにされてしまったぬいぐるみを目を合わせずにゴミ置き場へと
(あなたから普通に見えたならば前ぺちゃんこならばそれは横です)
見つけたと誰かが言えばそこにいて森が燃えても雨は降らない
行ったぶん戻らなくっちゃいけないし床にほこりはたまっていくし
やりかけのことがなかなか終わらない取ったメガネを置く場所がない

自由

汐射ハルカ

黒板を叩く白墨青色は藍よりいでし愛よりいでし
青いものばかり集めたこの部屋はどこかの国の黒い鳥の巣
数学をかなぐり捨てて飛び出してぼくの右側仮想のあのこ
過不足のない文章が送られて未読のままで朝が来たのか
シトラスではじまりムスクで終わる水そうだわたしは柑橘で眩惑う
あいを知り自由が散ったこれ以上紡ぎゆくこと出来ないさとり
落ちている櫛を拾っちゃいけないと教わるわたし七つの頃に
放課後のふたり街々燦めいて吹雪を走り肉まん買いに

冬、賀茂川にて

鹿ヶ谷街庵

あかぎれにニベアの青缶ぬりながらあるべき世界の夢をみていた
練乳をチューブから吸い怒ってるわけを言わない君のくちびる
もうきみが残っていたセーターの柄のトナカイみな死にました
家庭科で習ったカレーをつくってた 母の帰りが早まる気がして
見る前に跳べ、と留学したけれど今は家から一歩もでない
雪の日にお湯に浸かったカピバラも日本情緒のひとつと思う
泣きながら蟹とたわむれ啄木はそのあと蟹を食べただろうか
あみ棚におにぎりひとつ置いてあり爆弾をみるように見えていた

ライカ

西鎮

また十二月のあなたを思い出す雨がゆっくり雪になる日は
ふたりならよかったイルミネーションの真下を風を連れて歩いた
似たような遺伝子たちのすれちがうイオンモールは入江のゆらぎ
たぶん上機嫌な母が煎れたからくるくる踊る茶葉をみていた
廻ることのできない年の瀬へ誰かの鱗のように初雪
なにもかも上手くいかない日の終わりさんまの背骨をきれいに剥がす
漆黒の河へつぎつぎ消えてゆく雪、さよならの融点がある
ライカ、つてもう戻らない犬の名を遠くの雪原みたいに呼んだ

銃、ときどき短歌

雀来豆

笑うのではなく微笑んでいる バカ尾根をきみはかるがる上つていった
(あらそひたまへあらそひたまへ)そしてやたらスプライトを飲みたがるだけの人を撃て
ひとりなる歌会をはじめ 初めのところはとばして真ん中から話してみよう
撃てるかな?ドンキで買った焼き芋をドンキの前で拾った銃で
はてしない物語から帰還したあなたの顔一面の寝ぐせ
撃ていたずらに詩をあげつらうおっさんの形をしてる紙の標的ばんばん
たちあらわれず晶子も子規もまたたれも青空文庫のかげに潜めど
みんなパンケーキとかワッフルとかを食べているいったい雪食いは何処へ行ったのか

ゆきちゃんが好きだった

白藤あめ

ゆきちゃんの前では可愛くなかったしゆきちゃんもかつこよくはなかった
ゆきちゃんの知らないところが多すぎたなんで私は生きてるんだろう
ゆきちゃんがこつちを向いてくれたとき三回くらいあった気がする
ゆきちゃんと呼ぶゆきちゃんと呼ぶ私だけの呼び方ゆきちゃんと呼ぶ
ゆきちゃんの名前をたまに思い出す思い出せないこともよくある
ゆきちゃんがゆきちゃんが好きだったんだよ世界全部を敵に回しても
ゆきちゃんのことまで壊してしまったら私の世界は元に戻った
ほんとうのほんとう ずっと会いたいよ 二度と会いたくない 会いたい

必須アミノ酸

寿司村マイク

あがるよと仲間が言えばあがるよと込めた思いの笑顔を返す
体温と皺のかたちを転写して指折り握る鋼鉄のバー
三回の息を吐き出し四回目脛に沿わせて引き上げてゆく
つま先を揃えて開く靴底の溝に押しこまれるジムの床
新品のEAAのパッケージ届けた昨日のクロネコのひと
いつだって誰かの腰で爪二本待つてるパワーベルトに空く穴
おろしたて緩めのタンクトップには今晚消える折り皺がある
重力に負けない一八〇キロをこの真っ直ぐな背中を保つ

待ち人來たらず

たえなかず

出会えないと知っているからつぶやきの語尾の多くが過去形だった
「群青」のピアノ・バージョン胸痛を抑えるように祈る夜にも
親友に親友がいてわたくしの恋人に他の恋人がいる
アメリカン・ガールだったら棘もなく夏にあなたを捨てているはず
花束をくれた名残りにリモートの人生だけを見せてあげるね
ほほえみではじまり優しいほほえみで終わるあなたの秩序が嫌い
この冬を越すまで会えない 長すぎた一人芝居の雨やんでいる
わたくしはいかなる男も信じない そう思ってからが恋愛

猫も夫も

多香子

ガスの火の青いゆらぎを見つめてる湯が沸くまでのぬるい幸せ
定位置にいつも坐っている猫の片耳だけが黒い通学路
痛む手に右手を添えて介助する夫ありがたき白梅の道
無意識に寝言を言ってしまう猫はしっぽの先を揺らして眠る
その角を曲がって三つ目ケーキ屋にあなたの好きなエクレアがある
もう一度人恋う歌が詠めるかと思いつつ裏にゴミ捨てにゆく
樫の木の扉の陰のうす闇にあなたによく似た白猫が待つ
連れ添ってもう三十年たったからお互い空気みたいに軽い

暖冬に花

中村成志

トーストを囓れば月の沈む朝 穴を空けないピアスもあつて
浅すぎる水の流れを手のひらに掬おうとする藻掻きのごとく
後れ毛を挟めば耳は髪型の一部であると知らしめてゆけ
きつちりと締めて二秒の蛇口より咳喘ぎつつ水の一塊
大谷石の垣の削れに刻をおもう幾々千の雨の流れを
見るならば手の甲だろうひと筋の傷のみ皺を寄せ付けない甲
軀の無い男なるもの肉求め湖へと浸るこの真冬日の
質問を幾度も変えてあぶり出す性格のよう、暖冬に花

セーフティゾーン

なべとびすこ

火をつけてない爆弾と寝るときにマッチは極力遠ざけて置く
グラノーラ 朝に追われているような気がする朝に声援をくれ
紫陽花の種の形を知らないし精子の頃の思い出もない
パラサウロフスのリュック背負ってる子どもはずっとニコニコしてる
傘に鍵、靴に鍵、ロッカーに鍵 はだかの僕を誰も殺さない
消火器は役に立たないまま寿命 きれいなままで終わったバンド
ガスタンクは京セラドームを道連れにするだろうその火を見送るよ
法律のレールのうえを歩いてるTAB譜見ながら弾くギターソロ

冬の青空

千原こはぎ

まだ遠いあなたは置いてきぼりにする また眠れないまま夜の底
てのひらにふれた真昼を何度でも反芻しては傷ついている
(いつかっていつだろう) 訊くこともなく目を閉じたって浮かばない顔
結末は離れて終わることももう知っていてそれでも観る映画
イルミネーション一度も見ないままだった冬なのにこんなにも青空
「待ってる」と言えたら違う春になる マフラーをこれでもかと巻いた
たよりない決意が揺らがないようにもつれる足をまた前に出す
死ぬときは結局ひとり ひとりでも眠りにつける強さが欲しい

しりとりしうぜ

ともえ夕夏

りんごりらそれは赤くてすべらかであるいはドラミングで求愛する
十五時のバスに間に合わなかったらンジャメナを使ってもよしとする
ごりらっぱそれはファンファーレで高く吼える金色の類人猿
辞書を引く指の好奇心に充ちてああいふふう調べられたい
らっぱんつこれはありそうまたいつかベルボトムとか流行るといいね
自転車に乗るとる ばかりだよ ペダルサドルハンドル今日なに食べる
キラウエア火山、きらめき、嫌いだよ、おなじところに咲く花かもな
終わりにたくないからみかんジュースとかライオンキングをそっと差し出す

彗星

奈瑠太

逆毛立つような痛みを抱きしめてモヒートのなかでミントが青い
あゝ此処は夢の波打ち際だから耳もとにきみ想う潮騒
サラバ、星。メロウ、まつげを蝶にして目を閉じた エイジアのうたかた
わたしたち誰よりずっと甘かった明日には箱詰めされる桜桃
シリウスはいっそうの舟を待ち侘びて僕一番地の明るさを持つ
領収書の最後に会った日の雨のにじみが誘う大回顧展
開けもせず捨てない世界の空気缶めいた秘密と生き抜いてゆく
さようなら刹那、ノスタルジーそして静かの風に生まれる

Once upon a time

西淳子

おやすみのまえにきかせてくれないか？はっぴーえんどなかちかちやまを
火の鳥も幼いころはかちかちと、かちかちかちとないたのだろうか
背なに傷 くすりをぬったきみの手のやわらかさ、それだけをしんじる
しにぎわのせりふぼつとにはいつておかしくないね、惚れたが悪い
花をみるたびにわたしをおもいだすあわいのろいをいま、かけました
つき きれいだなっておもったら きみ きれいだっただなっておもった、ら
らいこうのようにしろいが、らいこうとちがうまっすぐ、まっすぐが手
をおじごくでんごくじごくおおじごくでんごくじごく、大地獄かよ

明るくはじまる今日で良かった

薄荷。

寒い日はミルク多めのコーヒーと一緒に劣等感も飲みこむ
ストーブが微かにじいいと鳴っていてシュールはきつとこういう音だ
お高めのバニラアイスを分けあって夜の長さをきみと味わう
ソファから投げ落とされたクッションのハートはハートのままで落ちてる
冷蔵庫じいいと唸って真夜中に働いている人もいるのだ
早朝にブランケットは優しくわたしの肌を温めている
カフェオレの湯気は白くてこれからのことをあなたと話したくなる
朝方の雨に街路は輝いて明るくはじまる今日で良かった

トロトロな週末

はゆき咲くう

「君も飲むかい？」ドリップ泡がはじけてる いつものカップ並べておくよ
ブランチは雑穀米の粥仕立てデルフィニウムをちゃんと揺らして
特売のチラシ見つけた「今日だつて！」走れメロスよピーカンナツ
深夜ドラマのつまみにしよう 戦利品 腕に食いこむ重みうれしく
頭痛・肩こり・オレガノ混ぜてオープンへ グツグツしだすカラダ溶けだす
好きすぎてラップに残るクリームを味わい尽くす お行儀？ へいき
ユーカーリのエプソムソルトかき混ぜてお風呂に浸かる ゆでだこになる
週末はニマニマしてて顔の色バナナまるごと焼けばトロトロ

コール・アンド・レスポンス

疼木快維

僕ときみのどちらかがここで死んだとて出回り続ける二千円札
アナウンサーは臨時ニュースをあらかじめ知っていたかのように読み上げた
無数の蜂の 僕は猫背で早口で目を合わす 声 ことができない
《僕の絶唱》《残響》みんなイヤフォンを髪で隠して俯いている
中学で飼ってる兎を見るときひどくあかるい優生思想
僕が絶滅してからじゃ遅すぎる 灯台に三人の人影
血塗れの電話ボックスでは僕が夢占いをしているだろう
応答しろ俺の叫びが聞こえてるはずだ応答しろ応答しろ

京都・バス・電車

廣珍堂

外国人観光客の背中へとくつつきて待つ駅のバス停
少年は受験票だけを頼りとし駅から9番バスに乗りたり
終バスが九時前といふ街ならば灯火のごとおりますボタン
難読の駅名を呼ぶ嵐電の車掌の声は土地のひとらし
狭すぎる安全地帯に立つひとと減速し行く準急電車
微笑みとサムズアップで会話する外国人と都のひとは
地下鉄の赤字路線の駅に立つ観光客と中学英語
琵琶湖まで十五分なる地に住みて大津の宮の古き声知る

定食屋から洋食屋へと

笛地静恵

きさらぎの駅へ降り立ち駅前霧のかすめる定食屋へと
たわむれに母を背負いてそのあまり重さに負けて二歩を歩めず
お母さんその喜びの日よたまきはる分裂はじめわれ受精卵
ほほえみに似てはるかなれ霜月の家の中鳴るピアノ一台
いまだけの気配を示す北風の雲を友とし尾根わたりゆく
寒風にゆられようやく居酒屋の四角四面の湯どうふの白
ほてりたるてのひら握り地下鉄の駅へ下りゆくひとりにかえる
小さな画廊をめぐりいきつけの洋食屋にはいつものワイン

同位体

福山桃歌

薄氷は割れてばらばら本能に従えぬまま咲いてしまつて
キャンディがゆるくほどけていくように愛されていた記憶があった
無自覚に傷つけて傷つけ合つて今さら嘘と言われましても
拘束の痕は赤くて剥がされた鱗が部屋に散らばっている
殺されるんだろうな 恋に 絶望に 眩しい朝に この感情を
投げ出した腕で確かに触れたんだきみの同位体やわらかかった
まだ狂気ほどではなくて微熱 目の奥を焼かれるような鈍痛
抱きしめてほしかった 愛させてほしかった なんにも残らなかった

そつとおやすみ

まさけ

一回も使わなかった防犯のブザーのボディーがとても艶やか
よく見ればいくつも傷がある共に来た六年の足跡のごと
卒業を迎えたバディの惜別のようになかなか取れぬカラビナ
最後くらい声が聞きたいなんて詩のよう息子が朗らかに言う
絶唱はややソプラノで目を丸くしてる息子とおんなじで、まだ
解放の儀式のように抜いているリチウム電池のきらめくひかり
手の中に一つのいのち 新しい制服にあるボタンのかたち
聖櫃のような模様のチョコ缶に入れたブザーよ そつとおやすみ

P、はじめました

御糸さち

アイドルを育てていたら午前四時 パラメーターが少し足りない
二十余名のアイドルみんなかわいくて攻略法があつていいなあ
オーディションに失敗しても大丈夫！やり直せるよ!!ゲームだからね!!!
実在の子の育成の息抜きに育てるアイドル何周だつて
攻略法はないし周回できないし親ガチャ失敗とか言われそう
親は子のプロデューサーではありません。予算は調達してますけども
※シャニマス[※]の息抜きに買う[※]GS4[※] ※意味は各々ゲグツてもろて
高校生育てていたら午前五時 私の節度バラが足りない

夜間授乳

深影コトハ

アラームは3:00 泣き声は2:50 自然に目覚めてしまう2:30
まだ慣れぬ乳房の痛み 宙吊りのプーさんと目が合う真夜中に
仮免の母と子なれば吸う方も吸わせる方も首を傾げて
もう二度とせぬ恋のこと歌にしつつ歯のない口に乳を嘔まれる
永遠と思えるような瞬間の繰り返しなのだろう生とは
吐き出すのが下手なのは父譲りだね母はゲップを根気よく待つ
雨粒の滴る如きか細さで寝息を立てる 吾は眠れず
生理的減少終えてここからは昨日を超えてゆくばかりの朝

想像の途中

未知

もはやそれ魔法でしょうと言う時のきみの瞳に乾杯したい
そんなんでいいの後ろの後れ毛が少し無防備すぎやしないか
あざといと思うよきみが笑うたびあちこち光って濡れているから
捕まえてごらんと急に走り出すピアスとともに跳ねる心臓
「黄色つて嫌い。なんだか無理にでも元氣出せって言われるみたい」
震えてることは秘密に歌い出すときどき声が飛んでかすれる
傷痕はまだ見せないで想像の想像のまた想像の途中
ほっとけば生える雑草なんだけどほっとけなくて陽射しと撫でる

開戦の報

深山睦美

あ、分からないんだ先生。そうなんです。こういう一揆はない。これまでは
本当に悲しがつてる人だけが、かなびよ丸と言うんじゃないか
吊り革に首まで入れてみないかと微笑んでいる小顔の広告
怪物にも被選挙権があるんだねもうパフェじゃない液を掬って
心臓をラジコンにして走らせてないの日本で君だけラジよ
宝塚歌劇団の団の字が團になったら帰ります 母
徴兵を拒否した殺戮ロボットの家に卵を投げる人々
君のその病氣、俺が見つけたから、俺の名前がついてるんだぜ

幸福論

虫武一俊

確実に老いに向かっていることを思う秋空に足止まるたび
手放した幸福論が大空に大きな弧を描く十一月
慣れはただ見て見ないふり ヘシ折ってしまいたくなる一日はある
アキレス腱付着部炎の長引きよ一度に冬も老いも来るのか
歌集評 行ったり来たりするたびにドアの細部が気になっている
ctrl+vもできない ctrl+yもできないうつつよあわれ
酒も飲まないのに脂肪肝人生は反動と衝動でできている
もうジャンプしなくてもいい校庭のジャンプタッチの全てに届く

夜の果てまで

水也

寒くても待っていたのは誰のこときつとだれかが、きつといつかは
届かぬと知った言葉は幼き日惑うところは破片になった
目を閉じて息もいつとき止めようよ過ぎゆく時間みないふりして
痺れる指先ほろり血を流す気づかなかった気づいても、まあ
連れ出してあげたかったよ伸ばした手短すぎたし力もないし
たましいを注ぎ縮めた間隔はあざやかな赤色をしていた
冬に咲く花を探して夕暮れに立ち止まってた僕はゆくよ
糸結び眩い星に導かれ夜の果てでも音が聞こえる

太陽と星

宮岡りょう

太陽を掴んでしまったあなたとは月まで行っても会えないだろう
聞いてない ロックスターが本当に 小さな星になるなんてこと
薄闇の多摩川沿いで立ち尽くす 世界の終わりをInstagram^{イスタグラム}で知る
新しい弦を手繰って張り替える 今は悲しい音しか出ない
あの歌詞に意味を求めてしまいうならロックはやめて学者を目指せ
紫の太陽のもと踊ってた路地を過ぎ去る満員電車
もうとても盗んだバイクじゃ走れない歳の僕らは駅のホームで
葬式は「空洞です」をかけてくれ フェスタイトルは「So Alive」で

桜が香るクリスマス

村田一広

レモンアップルミントシナモン見逃して桜の紅茶見つけて買った
ふはふはふは湿り気(雪)がほしかつた今年のクリスマス乾いてた
季節が終はる頃にリバーシブルだと気づく早速裏返す
芯出ないシャーペン書けないボールペンかすれたサインペンまとめ売り
うどんなら許される気が。真夜中に立つたまま啜ってる台所
重さの好きな缶ビール飲み干した軽さ怖くて飲めないでゐる
手に執つた蜜柑ふはふは軽くつて果肉がはりの日の光満つ
カステラと厚焼き卵似てるよね両方ならべ紅茶がすすむ

古楽の夕べ

森内詩紋

もろもろと灰色の雲は風にとけフィドルのごとく木立を鳴らす
チェンバロは誰か呼ぶ声 誰を、かは未だわからず されど待たるる
木管のフルート奏者半眼で消えゆく音を宥めるように
ヒュンメルヒェン愉しき音色この曲に合わせて踊る乙女在りしか
合いの手はハーディガーディたちまちに祭りの気分あたりにあふれ
明々と燃ゆる暖炉の前できくラウシュプファイへ腹まで響く
語りべはリユート爪弾き遠国の物語せり むくわれぬ恋
冬の日にシチリアーナはしみてゆく 誰も傷つけぬうたを詠みたし

藍色のさみしいとりが渡るのをあおぎみている冬の角度で
疲れたらやすめる本がほしいです その綴じかたになまえをつけて
いなくなった仔猫のことをかんがえる胸にしらない木がまた増える
あらかたをさがし終えても出てこない冬のリボンは冬の国へと
ぜつめつをまぬがれた鳥それからをゆつくりのぼる螺旋はみたか
みずうみは絵のように死に、絵はうたいつづけるパイプオルガンのように
なにもかもうしなうまえにこの森へきなさい きみのすべてが蔵書
リマインドしました ここを旅立つ日そつとあずけたいものがあるから

こっことは空へお引越し

杜野詩季

真夜中のコーンスープに熱い風呂失くしたことへの冷えは止まらず
後悔の質とか量とか違うけど似ている顔で泣く私たち
不条理の渦を見せつけテレビには母が案じた中東情勢
溜められたチラシのゴミ箱広げれば炊事の度に母を想い泣く
入院を繰り返すたび増えていたブラのコップの底には「コウコ」
伯父さんの手紙が眠る饅頭の小箱を誰が継ぐか案件
朝顔は庭で小さくまだ生きる駅前広場は葉牡丹なのに
納骨で香る線香氣がつけば気持ち良い空晴れ女の母

サンタさんではないけれど日曜のイブの日に来るドクター一人
賀詞交換会のごとくに次々と声かけるドクターペイシェントたち
いつもなら満車状態通り抜けできぬところをジグザグ歩く
枝垂桜万両の実に声かけるあれのみぞ居る正面玄関
寒けれど三三五五と散歩する同じ階なる顔見知りたち
あをぞらに薄雲ありて眺むれば引き返しくる人に驚く
静寂なときの戻りぬクリスマスイブのゆふべの病棟ホール
各サイト巡回しては兼題を書き留めにけりクリスマスイブ



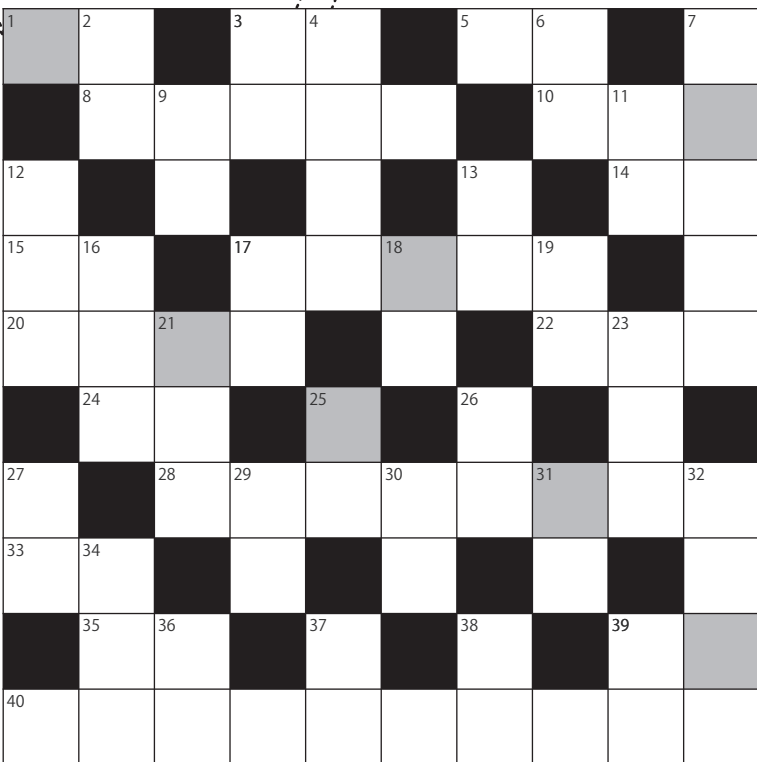
ほっとひといき

気軽に

クロスワード

色付きマスの文字を並べ替えてことばを作ってね

こたえ



ヨコのかぎ

- 1 ○○の輪、○○袋、○○比べ
- 3 歩いたり走るときに使う
- 5 魚を取る道具
- 8 東海道新幹線の起点駅
- 10 月が明るく照る夜
- 14 傍、忘、忙、共通の読みは？
- 15 2番目の干支
- 17 これから先。未来。
- 20 ～は三文の徳
- 22 原稿を寄せること
- 24 笑いの○○が合う
- 28 有名タレントやインフルエンサーは持っています
- 33 首・手足・しっぽ以外の体の部分。
- 35 父や母の女性のきょうだい
- 39 魚○○、ヨーヨー○○
- 40 即席めん

タテのかぎ

- 2 今年は辰
- 3 ○○の雲「ふわ」と数えることにする 一ふわ二ふわ 三ふわの雲 / 吉川宏志
- 4 ボーナスの別名
- 6 植物が出す甘い汁
- 7 火事を消し延焼を防ぐ。○○○○○車。
- 9 鬼はそと、福は○○
- 11 物事がもつしくみの大きさ。「地球○○の環境汚染」
- 12 脳の活動によって発生する弱い電流の変化
- 13 田舎で人家が集まる場所。「第一○○人発見」
- 16 わが○○○を干さん高さの向日葵は明日ひらくべし明日を信ぜん / 寺山修司
- 17 春夏秋冬
- 18 黒くてとげのある海の生き物。中身はオレンジ。
- 19 手をのべてあなたとあなたに触れたきに○○が足りないこの世の○○が / 河野裕子

- 21 記憶。「身に○○がない」
- 23 いま生きている現実。現世。
- 25 これが出るときはマスクをしてください
- 26 ○○印、○○鎖、○○書。
- 27 旅先で泊まる所
- 29 相手の言うことを打ち消すときに使う言葉
- 30 女子だけが集められた日パラシュート部隊の○○に膝を抱えて / 飯田有子
- 31 地球の表面で、水におおわれていない部分。
- 32 君主として国を治めること
- 34 韓国の貨幣単位
- 36 終○○にふたりは眠る紫の〈降りますランプ〉に取り囲まれて / 穂村弘
- 37 めぐり合わせ。ラッキー。
- 38 魚などが水中生活するための呼吸器
- 39 指の先端にあるかたい部分



東海道新幹線から海が見える たぶん死ぬ日も見る同じ海
 最新のアニメを追える日常は豊かで四季をにぎやかにする
 見つめあうことはなくても僕たちは新快速でもたれて眠る
 振り向けばおろしたばかりのペン先の描く螺旋のやうなさみしさ
 見たことないふたりになりたいならやったことないことをやって見せてよ
 鳴き交わすだけでいいのに声は荷を新しさの贋の荷を運ぶ
 あらたまの年の初めにかかる月 満ちては欠ける久遠の流転
 新鮮な朝顔見ればパレードが思い出されて体格差知る
 とりあえず「新」ってつけければ千年も前のものでも若者が継ぐ
 白色の筆が墨色さらわれて新しくなるなんてばかだよ
 この嘘を新しい約束として未来のために指切りしよう
 見たことのないものであふれる世界 怪物たちの新居のように
 新しい願いを日差しにさらしたらあの日の毛並みの匂いの夢を
 新月に何も見えない夜を越えて、いつかは終わる旅をしている

◆ 秋山生糸
 ◆ 麻倉ゆえ
 ◆ 雨虎俊寛
 ◆ 有村桔梗
 ◆ 井倉りつ
 ◆ 池田竜男
 ◆ 十六夜／朔
 ◆ 石川順一
 ◆ いふじしょうた
 ◆ 魚野さざみ
 ◆ 宇祖田都子
 ◆ 泳二
 ◆ 歌島孟



免許証更新葉書いま光った雷がどんと落ちる音
 新月に願いを掛ける寂しさで地球は今日もゆっくり回る
 みなが詠む短い言葉の積もる山で私もあらたな雪の手の者
 新書本と文庫本が並ぶ本棚のでこぼこで成す世界平和
 新しく覚える人も居なくなる最後の春を見送る校歌
 新人の電気毛布はデビュー日にニャンモナイトを先輩と呼ぶ
 ゆるやかにひろがりゆくかとどまるか年の瀬に酌む新酒の香り
 栞紐を引き抜く際^{きわ}にささやかな摩擦のありて新しき章
 鉄板の上で踊るよナポリタン新緑ピーマン素知らぬ顔で
 根をはってゆける気がした新しい街に來々軒をみつくて
 新雪の道辺にこぼるバケツから活版活字の旧字旧仮名
 まっさらな雪に足跡残していくつか貴方とまた出逢うため
 新松戸 新新松戸 新新新 松戸はずっとわたしの故郷
 新しい年こそやると言い聞かせ聞かせるうちに過ぎる一年

◆ 湊れ井戸
 ◆ 河岸景都
 ◆ きまぐれおゆき
 ◆ 君村類
 ◆ くうたか湖春
 ◆ 古城えつ
 ◆ 桜さくう
 ◆ 佐藤氷魚
 ◆ 汐射ハルカ
 ◆ 西鎮
 ◆ 雀來豆
 ◆ 白石夜花
 ◆ 白藤あめ
 ◆ せいや

新年の栞としてのマフラーを碧く垂らしてなびかせるひと
 新しい靴でゆく道 冬晴れは心をうまく乾かしてくれる
 焼き芋が着つる毎日新聞の昨日の株価一覧ぬくし
 月が地球に激突するの確率の年が始まるひかり、弥栄！
 新しい手帳をひらきもういない友の誕生日を埋めていく
 新米をおもちにかえてふつくとやさしく笑える人になりたい
 「新宿は豪雨」らしいが（しんじゅくのたいぎごはなに？）こちら快晴
 新しい靴下のタグを切る明日どこに行くかは秘密のままで
 言霊の幸わう部屋に招かれてポチ袋さて年玉いくつ
 新型の炎抱へてドローンは命中直前自爆を知らず
 ニコライの坂をくればラドリオのマスターの挽く新しき豆
 オルゴール厳かに鳴り更新の止まったホームページの吐息
 幾重もの時と人の手経た着物新たな主を得て輝く
 傷跡を見たくないから次の恋夜毎にかぶせて痛みを忍ぶ

- ◆ たえなかず
- ◆ 千原こはぎ
- ◆ ともえ夕夏
- ◆ 中村成志
- ◆ 夏生 薫
- ◆ 奈瑠太
- ◆ 西淳子
- ◆ 薄荷。
- ◆ はゆき咲くう
- ◆ 廣珍堂
- ◆ 笛地静恵
- ◆ 福山桃歌
- ◆ 細川エリカ
- ◆ 真岡まな

昨年にお湯を注いだどん兵衛に今年最初のくちづけをする
 スマホを落とした足にはアザが出来ていてすごいなあ最新のスマホは
 新雪のように磨けよ厨房に青い眼をした見習いがくる
 新雪にまみれてみれば冷たさは淡さと同義なのだと思います
 新しい靴を履いたのすこしだけ痛かったけど笑っているよ
 新しい国を作った15人すら集まらず少子化を知る
 大量のトランプを口から出してそのまま逃げていった新兵
 新顔です感じいいコンビニだけでも来られないかな旅先に
 新しき顔我も欲し今少し世に立ち向かう力つけたし
 あたらしいかなしみのこと 白樺のようにはがれるあなたの日記
 新人の気持ちで生きる父母おやという盾を失くした最初の季節
 来世では博士になって新しい花にあなたの名前をつける
 ピン札がATMから出るやうな奇跡できみと会ったのだらう

- ◆ まさけ
- ◆ 御糸さち
- ◆ 深影コトハ
- ◆ 未知
- ◆ 水也
- ◆ 宮岡りょう
- ◆ 深山睦美
- ◆ 村田一広
- ◆ 森内詩紋
- ◆ 杜崎アオ
- ◆ 杜野詩季
- ◆ 好乃智紀
- ◆ 臙





一首評

西淳子

アプリケーショで出会ったカップルが
アプリケーショでゆく喫茶店

溪響

略称の「アプリ」じゃなくて「アプリケーション」
なのが笑っちゃいました。上の句のがマッティングア
プリで、下の句のが飲食店を探すアプリとかでしょ
うか。「アプリケーション」だけで十四音も使っちゃ
うのはすごいですね。このカップルにとって「アプ
リケーショ」は恋のキュービッドなのかもしれないま
せんね（あるいはディストピアみたいな恐ろしいも
の?）。もしかしてだけど、感謝とか畏怖の念がある
から略称で呼んでないのかも?

一首評

中村成志

（海しかない町だと聞いた）月面に降り
立つ真白な素足の写真

北谷雪

静の海、晴の海、嵐の大洋……ういえば月にはい
ろんな「海」があったな。そう思わせる一首。
「素足」とあるが、アポロ16号の映像等から、宇宙
服の無機質な「真白」を想起させる。
何度も読むと、この歌の語り手は徹頭徹尾第三者な
のだな、と分かる（「聞いた」「写真」等）。
上句のバーレンによって、微妙に宇宙空間の不安定
さが増している。



一首評

そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

前々号のまちがいさがし 答えあわせ

10個のまちがいは
見つかりましたか?
16号のまちがいさがしの答えはこちら!

ほっとひととき 短歌で
まちがいさがし 答えあわせ

Illustration: 千原こはぎ @kohagi_tw

一首評

疼木快雄

土曜日の夜をふたりは持て余し、ライブ
カメラで、ジンベイザメを

早月くら

読点の産むリズムや言いさしによって、夜を「持て
余し」ている感が助長されている。この歌で重要な
のは、ジンベイザメを直接見ているのではなく、ラ
イブカメラで、そして恐らく家で見ている点だ。実
際に水族館へ行ったり、映画を観たりしないふたり
は、余白ある週末の浮遊感をそのまま楽しんでいる。
大きな水槽を雄大に泳ぐジンベイザメを、ふたりで
部屋で見る週末は、夜の空気を拡張し、弛緩して、
共有不可能な夜を構築してゆく。

一首評

雀来豆

アレクサ忘れてしまつてごめんなさい桃
の風味ののこるお酒を

小泉夜雨

八首連作のタイトルは「ピース」、歌人にとってこれ
は「ひとり笑う自撮りのポーズ」と思つて間違
いない。読者に共感や承認を求めるサインだなんて
考えないことだ。引用歌は連作の七首目、そろそろ
締めるべき頃合いなのに、まだあなたもきみも家族
も友人も出てきやしない。ほらそうでしょ言つたで
しょだれかと一緒にピースサインを掲げているわけ
じゃないんだ。わたしたちの傍にはせいぜいアレク
サくらいしかないんだって。

一首評

はゆき咲くら

キミとみたあの日の夕焼け紅茶色サバラ
ンサバラ 呪文のようね

十六夜／朔

ティーバックをくるくると回し紅茶が溶けだすま
で、時にすれば数分ですが、その数分に、キミとみ
たあの日の夕焼けと、紅茶と、サバランの、この3
つを用いることで、茶の美しさを連想させる素敵
なお歌だと思えます。サバランは洋酒がしみこんだ大
人向けの洋菓子。サバランサバランの呪文を扱えら
れるのも大人限定となりそうですね。呪文の効果で、
キミとみるまたの日も起こりますように。

一首評

西鎮

まぶしさに呼ばれたような、文庫本閉じ
れば川を横切るところ

早月くら

電車の座席で文庫本に目を落としていた作中主体が、
光線の変化にふと本を閉じ目をあげると、電車はちよ
うど川を渡つていた…そうした景が想起される。短
い時間に主体の身に起きた経過をそのまま詠うリア
リズムが、歌の第一の魅力だと思ふが、「まぶしさ」
〈文庫本〉〈川〉の関係性には何らかのカタルシスが
託されているようにも思ふ、歌の奥行きが増している。

短歌リレーコラム 望遠鏡 18



短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手

桐島あお

テーマ 女性の髪、それから 歌の背景について

小高賢 編「近代短歌の鑑賞77」（新書館・二〇〇二年）で取り上げられている七十七人の歌人のうち、十三人が女性である。彼女たちの代表歌として収録された作品を読んでいくと、「髪」というキーワードが頻出している印象を受けた。数えてみると、四八〇首収録されている女性歌人の歌のうち「髪（髷・髻）」を含む歌は二六首。約五パーセントとはいえ、十三名のうち九名の代表歌として「髪」の歌が含まれていることに、何か意味を探ることができないのではないかと期待した。

しかし、「髪」にまつわる歌が掲載されている九名のうち、五名の歌人については日高堯子氏が選歌しているということに気がついた。日高氏は著書に

「黒髪考、そして女歌のために」（北冬舎・一九九九年）があるほど「髪」への造詣が深い方である。近代の女性にとって「髪」が重要なモチーフであるというよりも、執筆者にとって関心の高いモチーフが多く選ばれたという側面は無視できない。とはいえ「髪」は古来頻出のキーワードであることは間違いないと思われるため、以下に「髪」から派生して考えたことを思うまま述べていく。

古文の授業に出てきそうな和歌から現代に至るまで、歌のなかで「髪」は生命力の象徴のように詠まれることが多い。

その子二十櫛にながる黒髪のおごりの春のうつくしきかな

／与謝野晶子

はまさにその代表例と言えるだろう。黒髪によって弾むような若さをイメージさせたり、反対に髪質の変化から肉体の衰えを実感させたりする歌は、先に挙げた「近代短歌の鑑賞77」でも例を見ることがができる。

待つといふ一つのことを教へられわれ髪しろき老に入るなり

／片山広子

また、髪が乱れるさまから、恋の一場面であつたり、気持ちの乱れを想起させたりする歌も時代を問わず見つけられる。

黒髪の乱れも知らずうち臥せばまづかきやりし人ぞ恋しき／和泉式部・後拾遺和歌集恋三・七五五
長い時を超えて、時代背景の異なる歌に共感できる喜びは、歌を読む楽しみのひとつだと思う。

一方、こうした普遍的イメージとはやや趣を異にする、その時代独自の「髪」の歌もある。

くらべこし振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

／伊勢物語「筒井筒」より

となく、多様な視点を学ぶことができたら嬉しい。

【今後の課題】

・女性の出家に関する「髪」の歌を見つけることができなかったため、探す。

・現代の「髪」の歌について考察する余裕がなかったため、長いスパンで鑑賞していく。

・近代以前の歌について考察する際に、「背景を知る前の鑑賞」「背景を知ってから鑑賞」のどちらにもなるべく記録する。

※今回は限られた字数の中でテーマを絞るために「女性」という分け方をしましたが、生物学的な意味での性別で区分けして論じることの乱暴さについては、自分の中でまだ整理がつかないままです。

【参考】

小高賢「近代短歌の鑑賞77」（新書館・二〇〇二年）
山川登美子記念館（福井県小浜市）
<https://www1.city.obama.fukui.jp/omiko/index.html>

【髪に関する短歌 一部抜粋】

片山広子 3首
くしけづる此黒髪の一筋もわが身の物とあはれみにけり

与謝野晶子 9首
せつなかる愛欲おぼゆ手に触れしおのれの髪のはらかさより

山川登美子 4首
狂へりや世ぞうらめしきのろはしき髪ときさばき風にむかはむ

平安時代に成立した伊勢物語のこの歌では、髪型の変化が女性のライフステージのちがいを象徴している。「髪を上げる」行為が結婚を想起させる点は、現代との大きな違いと言えるだろう。また、古文で「髪を切る」といえば「出家」を意味することが多いが、現代で「髪を切る」といってもまず出家であることはなく、何らかの心境の変化を暗示する印象が強いように思う。さらに、現代であればカットにとどまらずヘアカラーやブリーチを題材とすることもあろう。先に挙げた近代短歌の鑑賞77では、もちろんそうした歌は見られない。

こうした例をみていくうちに「歌を鑑賞する際に、どれほど歌の外側に目を向けるべきか」ということをふと考えた。

わたしは短歌を鑑賞し、感想を表に出す場合、なるべく歌そのものだけに着目して鑑賞したいと考えていた。歌は実景であるとは限らないのだし、作者の本心そのものであるとも考えていないので、作者自身のプロフィールやいま置かれている状況といった「背景」について必ずしも目を向ける必要はなく、むしろ勘案しないほうがよいのではないかと、も思っていた。

しかし、たとえば

いもうとの憂髪かざる百合を見よ風にやつれし露にやつれし

／山川登美子

を鑑賞するとしよう。初読では、作中主体が「いもうと」の髪（と髪飾りの百合）を詠んだ歌であるように思える。だが、歌の背景にも目を向けることで、見えてくる光景は一変する。

「百合」というモチーフは、登美子が敬愛する与謝野鉄幹から与えられた雅号である「白百合」を想

茅野雅子 1首

髪ときて秋の清水にひたらし燃ゆる思の身にしるきかな

四賀光子 1首

やはらかにわが黒髪も匂ふなりさくらさく夜の湯帰りの道

柳原白蓮 3首

今日もまた髪ととのへて紅つけてただおとなしう暮らしけるかな

三ヶ島霞子 1首

洗ひ髪かわく心地に雨はれし麦のみどりをわたる春風

九条武子 2首

もとゆひのしまらぬ朝は日ひと日わが髪さへもそむくかと思ふ

今井邦子 2首

自らをあざけらむとて丸髻をにくにくしくも結びにけるかも

若山喜志子、原阿佐緒、岡本かの子、金田千鶴 0首

※名前の後は、掲載歌のうち「髪」に関する歌の数。スペースの都合上、ひとり一首の抜粋としました。

※「0首」について、あくまで「選者が代表歌として採らなかった」というだけで、髪に関する歌を作っていないという意味ではありません。



Twitterハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

連作欄 8 首の連作 自由詠
テーマ詠欄 「3」 3 周年!! /
一首評 「そらよみ」
短歌リレーコラム 「望遠鏡」
リレーエッセイ 「いちごいちえ」

短歌募集

第19号 24 2/29 (木) 24時

8 首の連作 自由詠 テーマ詠 「3」 1 首

第20号 24 4/30 (火) 24時

8 首の連作 自由詠 テーマ詠 「野」 1 首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

新しい年がやってまいりました。本年も短歌誌「うたそら」をどうぞよろしくお願いいたします。本年がすてきな一年となりますように。元旦早々、北陸で大きな地震が起こってしまいました。わたしもこの作業をしつつ震度4の揺れを体感し、阪神淡路や東日本大震災を思い出して気分が落ち込んでいます。「うたそら」のご投稿者様の中にも、被災地やその近辺にお住まいの方がおられるかと思ひます。どうかお一人残らずご無事で、一日も早く元の生活に戻れますよう。
次号は3月発行の3周年号です。テーマ詠のお題は「3」です。たくさんさんの作品をお待ちしております。

編集鳥 千原こはぎ

今号のうたそら 第18号

参加歌人様 68 名
連作欄 52 名
テーマ詠欄 55 名
一首評 6 名

コラム 桐島あおさん
エッセイ 高良真実さん

ご寄稿いただき
ありがとうございました!



illustration: kohagi chihara

ひとの子ににんべんの仔を使はざるわれらは市役所に行列をなし

高良真実



18

リレーエッセイ

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ

書き手

列

高良真実

大学一年生のとき、入門的なオムニバス講義があり、好きなものを百個書き出したノートを作るというよ、と教わった。素直で律儀なタカラさんは好きな短歌を豆本ノートに書き付け始めた。

好きな短歌がずらりと並んでいるのは気持ちのいいものである。数年が経ち、今の私の短歌ノートはテキストデータで、歌集出版年順に整理している。評論を書く上ではこういうデータベースがあると便利だ。

この、いわば短歌の「列」から、「列」の短歌を探してみると、はじめに次の歌が目についた。

畑に出て見ればキャベツの玉の列白猫のごと輝きて居る
／北原白秋『雲母集』(一九二五)
北原白秋の歌なのだが、キャベツつながりで制作時期の近い茂吉の歌がなんだか頭の中にちらついてしまう。
狂院のうらの畑の玉キャベツ豚の子どもは越えがたきかな
／斎藤茂吉『あらたま』(一九二二)
猫はかわいいけれど、公園に猫がたくさん群れているとすこし怯えてしまう。「列」は一語で「たくさん」のイメージを連れてきてくれるから便利だ。白秋の歌は牧歌的だけどすこしこわい。たくさんはこわい。茂吉のほうはもっとこわくて、キャベツと豚を取り合わせたら野菜炒めになっってしまう。にんげんの手を逃れられず食べられる子豚の運命が暗示されているように思えてならない。

ああ大地はかくも音なく列をなす蟻を殺してある大西日
／渡辺松男『雨る』(二〇一六)

最近の短歌で「列」のこわさを活かしているのはこの歌だ。この歌で列をなしているのは「蟻」ではなくて「大地」ということになっているけれど、思い描くのはむしろ巣穴に向かって列を

なす蟻で、かつ蟻たちが大西日を背景に死屍累々をなしている景だろう。死屍累々……。ところで渡辺松男の代表歌には「夢にわれ妊娠をしてパンなればふつくらとしたパンの子を産む／『泡宇宙の蛙』(一九九八)」がある。今度はパンに並んでもらおうか。こんな歌がある。みずからはイルカであるを疑わずフランスパンが整列をする

／土井礼一郎『義弟全史』(二〇二三)
イルカの口のあたりは確かにフランスパンの形に似ている。しかし本当に「疑わず」まで言えるのだろうか。本当のところはパンに聞くほかにいけれど、パンに口なし。むしろ食べられる側である。土井礼一郎の『義弟全史』は二〇二三年で一番おもしろい歌集だった。

こうしてみると「列」の歌は食べ物と生き物ばかりである。たぶん私の好みなのだろう。

「列」に限らず、任意の言葉で過去の歌を探してみるのはいくつこう楽しいからおすすしめしたい。そうやって楽しんでいるうちに、私も歌人の列に加えられるかもしれない。



うたそら 第18号

発行：2024.01.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>